

## 5月6日 復活節第5主日

使 14:21～27 黙 21:1～5 ヨハ 13:31～35

### 1. ヨハ

私たち教会にとって、イエス・キリストは「栄光の主」(Iコリ2:8)です。御子イエスは死者の中から復活して父なる神の右の座に着き、栄光と栄誉の冠を授けられました(ヘブ2:9)。使徒パウロは、すべてのキリスト者に神が「イエス・キリストの御顔に輝く神の栄光を悟る光を与えてくださいました」と述べています(IIコリ4:6)。

教会とは、このキリストが救い主として再び来られる終末の日を待っている共同体です。「あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(コロ3:4、フィリ3:21) 使徒たちが宣教した福音は、この“秘められた計画”を明らかにしました(コロ1:26)。「その計画とは、あなたがたの内におられるキリスト、栄光の希望です。」(コロ1:27)

この、キリストの昇天と再臨の中間の時代にある教会に、イエスは「新しい掟……互いに愛し合いなさい」(v.34)をお与えになりました。それは人がキリストの救いを受けた初めからの「古い掟」でありつつ、しかも日毎に「新しい」のです(Iヨハ2:7-8)。なぜなら、それは洗礼の秘跡によってキリストの死に与り、新しい命に生きる者となった共同体の兄弟の間での掟であり(ロマ6:3-4)、「共に(近づき来たりつつある神の国の恵みにあずかる者」(フィリ1:7)への掟だからです。

v.35 「互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

もし、「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(エフェ1:7)という前提がなければ、それは決して聖書が語る「新しい掟」ではあり得ないことを、再確認しましょう。

### 2. 黙

“僕ヨハネ(1:1)”は、「神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証した。」(1:2) 彼は「聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。」(21:2) そして、玉座から語りかける大きな声を聞きました。「見よ、わたしは万物を新しくする。」(21:5)

復活の主が「新しい掟……互いに愛し合いなさい」をお与えになったのは、この「新しい天と新しい地」(21:1)の希望を共有する代々の教会に対してであることを、現代の多くのキリスト者は教えられることなく、また自ら学ぶこともなく歩んで来ました。そして、これを「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」(レビ19:18)という、もっと古い掟の延長線上でしか理解しませんでした。

過去の欧米キリスト教諸派による“外国伝道”(Mission)が、しばしば善意に基づくキリスト教文化の宣伝や、大衆や諸民族のキリスト教化の推進であったのは、そのためです。新約聖書によれば、使徒たちは文化や宗教の宣伝をしたのではありませんでした。彼らは福音を、それもキリストによる“新しい”福音を宣教したのです。しかし、現代のキリスト者たちは教会で、福音に代えてキリスト教的道徳や文化を、御子の血による贖いと永遠の命に代えて“古い掟”に過ぎない人類愛の教えを、聞かされて来ました。

このため、黙示録が描く“天の玉座に着いておられる栄光のキリストを礼拝する大いなる会衆”には違和感を感じ、むしろ貧しい民衆に愛を語る“優しいイエス”というお伽話の方に親しみを覚えて来た人々にとって、彼らが使徒継承によって教会が受け継いで来た聖伝と聖書については殆ど無関心となってしまったのは、当然の帰結であったと言わなければなりません。

しかし、今朝の黙示録の朗読を通して神のことばに耳を傾ける人は幸いです。その人はまた今朝の福音書の朗読を、そして「今や、人の子は栄光を受けた」というイエスの言葉を正しく理解することが出来ることでしょう。主がお与えになった「新しい掟」は、“わたしたちの卑しい体を、天上のキリストの栄光ある体と同じ形に変えてくださる”(フィリ3:21)という、“新しい希望”を共有する教会のためのものだからです。

### 3. 使

v.22 「“わたしたちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なくてはならない”と言って、信仰に踏みとどまるように励ました。」

このように語った使徒たちの言葉に、聖書を通して信者が生き活きと耳を傾ける教会からこそ、再び現代に使徒たちの宣教を継続する司教と司祭が生み出されることでしょう。そのような教会の覚醒を期待して、私たちは21世紀の歩みを進めて行こうではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。

## 5月13日 復活節第6主日

使 15:1-2,22-29 黙 21:10-14,22-23 ヨハ 14:23~29

### 1. ヨハ

v.23 「イエスはこう答えて言われた。“わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。”」

先週学んだ「新しい掟」が、キリストの十字架の血によって贖われ、罪を赦され、神の国の希望を共有する代々の教会に対して与えられたものであることを理解した上で、それがさらに「わたしの掟」(14:15,21)「わたしの言葉」(v.23,24)「わたしが話したこと」(v.26)と言い替えられて話が進んで行っていることに注目しましょう。

キリスト教の中でも、しばしば原理主義的な傾向の強い教派では、それらをイエスに起源する“規則”や“戒律”のようなものと考えます。しかし聖書はこれらの用語を、“神が御子の死と復活の出来事を通して語られたこと”(ヘブ 1:2)、“その出来事に基づいて使徒たちが宣教した福音”(ロマ 10:14-17)として、信者たちが理解することを期待しています。「わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました」(エフェ 1:7)という信仰、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(ヨハ 6:54)という主の約束、それらすべてがこの「わたしの言葉」の内容なのです。

互いに愛し合っている、すなわち共にミサをささげている共同体、それが教会であり、この教会が代々にわたって正しく福音を継承し、それを拠り所として歩むために(1コリ 15:1)、天の父と御子キリストは聖霊を遣わしてください(v.26、ニケア・コンスタンチノーブル信条「聖霊は父と子から出て」)。聖霊は、すでに成し遂げられたキリストの永遠の贖い(ヘブ 9:12)に何かを新しく加えることはなく、新しい啓示を与えるものではないことを理解しましょう(v.26、1コリ 3:11)。

### 2. 使

使徒パウロが第一回目の伝道旅行を終えて、福音が異邦人世界に拡がり始めた頃、ユダヤ人教会と異邦人教会との間に律法に関する論争が起こりました。この問題を協議するために集まったのが、いわゆる“使徒会議”(紀元49年頃)です。そこで明らかにされたことは、救いは律法の行いによってではなくて、イエス・キリストの贖いを信じる信仰によって与えられる(ロマ 3:21-24)ということでした。

この会議でエルサレムの使徒たちが、異邦人教会に宛てて書いた手紙の冒頭には、次のような非難が書かれていました。

v.24 「聞くところによると、わたしたちのうちのある者がそちらへ行き、わたしたちから何の指示もないのに、いろいろなことを言って、あなたがたを騒がせ動揺させたとのことです。」

使徒たちを超えて、だれもキリストの救いに条件や制限を付けることは出来ないということが、明言され

ているのです。

v.29 は、恐らくレビ 17-18 章 によると思われますが、それは“イスラエルであると異邦人であるとを問わず命ぜられた”(レビ 17:8,10,13, 18:26)律法であるという理解に基づいていたようです。それに対して割礼については、アブラハムとその子孫のために命じられたものである(創 18 章)という区別が、考慮されたものと思われます。

私たちが日常聖書を読むときにも、そこに書かれているイエスや使徒たちの言葉が、本来だれに対して語られたものであるかということを理解することが大切です。自分がイエスになったり、使徒の一人になったように錯覚することは、聖書を曲解してしまったり、原理主義的な誤りに陥る大きな原因の一つです。

この使徒会議から異邦人教会に送られた手紙の背景には、当時の教会の生き活きとした信仰があることを知りましょう。「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされると知って、わたしたちもキリスト・イエスを信じました」(ガラ 2:16)と書かれているとおりです。

### 3. 黙

“僕ヨハネ(1:1)”が見た天のエルサレムには、人間の建築による神殿もなく、被造物である太陽も月もはや輝いていませんでした。

歴史の教会は人間が作った組織であり、それは人間が考えた規則と制度によって維持されています。その限りでは、教会も常に罪と過ちから無縁ではあり得ません。人間が理想の教会を創り出したり、地上に神の国を建設できると考えるのは間違っています。

しかしそれにも拘わらず、地上の教会は“岩である使徒ペトロの上に建っている”のであり、“わたしの言葉を守る”キリストの羊の群であり、“神の国の地上における芽生えと開始となっている”(教会憲章 5)のです。地上の教会は、そこで代々にわたって正しく福音が継承され、すべてのキリスト者がそれを拠り所として歩むために、主が再び来られる日まで、天の父と御子キリストが聖霊を遣わしてくださるところなのです。だから、私たちは感謝しましょう。「アーメン、主イエスよ、来てください。」(22:20)

ハレルヤ、アーメン。

## 5月20日 主の昇天

使 1:1～11    ヘブ 9:24-28, 10:19-23    ルカ 24:46～53

### 1. ヘブ

9:24 「なぜならキリストは、まことのものの写しにすぎない、人間の手で造られた聖所ではなく、天そのものに入り、今やわたしたちのために神の御前に現れてくださったからです。」

イエス・キリストの死と復活を、御自身の血による永遠の贖いの完成として理解するこの証言は、使徒の証言であって、一つの宗団としての原始教会が作り出した解釈ではありません。

原始教会において、使徒とは、“主の公生涯の目撃者で、その復活の証人”となった特別な人々のことでありました。使徒だけが、福音を“啓示によって”受けたのであり、原始教会は使徒という土台の上に建てられました。そして歴史の教会が存続する限り、それはこの土台の上に建てられ続けて行きます。

イエス・キリストの死と復活は、ただ地上の出来事に止まらず、その血によって天の聖所に入れる新しい生きた道を、私たちのために開いてくださいました(10:19)。だから私たちキリスト者は、御国を受け継ぐという約束への希望を“公に言い表し”ます。

教会を通して神の救済史は今も続行しており、「それはさらに、世の終わりに栄光のうちに完成され・・・、普遍教会として父のもとに集められる」(教会憲章 2)のですから、使徒は今も、現在の教会の中で、その福音の証言を続けて行きます。それは聖伝と聖書を通し行われています。歴史の教会が新しい使徒をもちや生み出すことはあり得ないので、その後継者である代々の時代の司教といえども「信仰の神的遺産に属するような新しい公の啓示を受けない」(教会憲章 25)のです。あらゆる時代の教会が、使徒たちのリアルな臨在を、聖伝と聖書の中に見出して来たことを感謝しましょう。

キリスト教を、過去のイエスと過去の使徒たちの思想に立ち帰って、それを現代的に再解釈することだと考えるのは、間違っています。教会を通して神の救済史は今も続行しており、教会は復活のキリストが現在支配しておられる“キリストにおけるいわば秘跡”(教会憲章 1)であることを、現代のキリスト者は見誤ってはなりません。

### 2. ルカ

vv.46-47 「メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」

使徒たちは「罪の赦しを得させる悔い改め」を宣べ伝えて、キリストの福音を宣教しました。すなわち、「悔い改めて福音を信じなさい」(マコ 1:15)と教えたのです。“悔い改める”とは、使徒の宣教においては、神と人との関係において人が神に帰ること、十字架の福音を受け入れて信じることです。

ですから、使徒パウロはコリントの町で宣教したとき、「わたしはあなたがたの間で、イエス・キリスト、そ

れも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていた」と言っています(1コリ2:2)。福音がキリスト教的文化や道徳や政治活動に置き換えられることによって、「キリストの十字架が空しいものになってしまう」ことを警戒しました(1コリ1:17)。

### 3. 使

v.8 「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、…… 地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

聖霊による靈感が、人々に福音を理解させるという意味で、歴史の教会において働き続けてくださることを、私たちは感謝しましょう。しかしそれは、聖霊が使徒たちをキリストの(福音の)証人としたという事実を超えて、新しい啓示を与えるということではありません。

歴史の教会は、使徒後の時代の教会でありますから、神は今日に至るまでこの教会に使徒たちの証言を通して語り続けておられます。歴史の教会が存続する限り、この使徒たちが宣教した福音が規範であり続け、いかなる個人も、また組織としての教会も、その上位の規範となることはないのです。

教会を通して神の救済史は今も続行しています。しかしその救済史には一つの中心点があります。この中心点とはキリストの誕生から最後の使徒(証人)の死までのことです。この期間の光によってだけ、私たちは御国の完成を待ち望む信仰を、“キリストにおけるいわば秘跡”である現在の教会への信仰を、共に保って進むことが出来るのです。

「約束してくださったのは真実な方なので、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう。」(ヘブ 10:23)

「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」(v.11)

ハレルヤ、アーメン。

## 5月27日 聖霊降臨の主日

使 2:1~11    ロマ 8:8~17    ヨハ 14:15-16,23-26

### 1. 使

使徒言行録は、教会の誕生の起源を五旬祭の日の聖霊降臨の出来事に置いて物語っています。原始キリスト教は、これを起源としない別の種類の教会を知りませんでした。歴史の教会は、この唯一の起源から離れては、キリストの教会ではあり得ないと言うほどに、聖霊降臨の出来事の物語りを大切にして、復活節の最後の主日のミサでこれを記念して来ました。

この使徒言行録のテキストの要点は、次の通りです。この日「一同」は一つになって集まっており、聖霊に満たされて、霊が語らせるままに話し出したということ(v.1,4)、その「一同」とは「使徒たち」であったということ(v.6)、そして彼らは「神の偉大な業」すなわちキリストの福音を語ったということです(v.11)。

新約聖書において、キリストの福音は“使徒たち”と結びついており、聖霊はその“使徒たちの宣教”と共に働いたことが述べられています。なぜなら、彼らはキリストの生涯と復活の目撃者であるというだけではなく、福音の証人また伝承者として、復活の主によって派遣された一団だからでありました(使 1:8)。聖伝と聖書は、唯一の正当な福音の伝承として、使徒たちが伝えたもの、すなわち「伝えられた教え」(ロマ 6:17、1コリ 11:2)、「キリストの言葉」(ロマ 10:17)と呼ばれる伝承を承認します(神の啓示に関する教義憲章 8-9)。

この使徒たちの宣教から離れて現代人が考え出す“新しい福音”と共に、聖霊が働いてくださることを期待するような人々は、聖書を正しく理解していないと言わなければなりません。聖霊が人間の熱狂や精神的集中などに置き換えて誤って理解されることによって、しばしば教会は使徒たちの伝えた福音とは何の関係もない歩みに陥りました。教会は使徒という土台の上に建てられているのであって、歴史の教会がさらに別の新しい使徒を生み出すことはもはやないのです。

### 2. ヨハ

「わたしの言葉」(v.23,24)とは、キリストの福音全体のことであって、決してある特定の教えや戒めのことではありません(5:24, 12:48 参照)。今日に至るまで代々の時代の教会は、使徒たちの宣教を通してこの福音を聞いて来ました。聖霊がすべてのことを教え、キリストの福音を理解させてくださるという約束は、使徒たち自身の体験であっただけでなく、さらに“使徒たちが伝えたキリストの福音”の宣教が受け継がれて行った使徒後の教会の体験でもありました。

教会で福音が宣教されること、会衆がこれを「神の言葉として受け入れる」(1テサ 2:13)ことが起こっているなら、それは聖霊の働きによるのです。この福音を聞き、共に福音に与って、御国を受け継ぐために、主は「互いに愛し合いなさい」という「わたしの掟」(v.15)をお与えになりました。

ところが現代の多くのキリスト者の偽らざる実感は、“聖霊が分からない”というものです。そんな私たちにとって、“教会で、ミサの説教で、使徒たちが伝えたキリストの福音を聞かされたことがない”というのが、久しく実態でありました。あたかも分かり切ったことのように“福音”とか“宣教”という言葉が使われており、しかもだれ一人として“使徒たちが伝えたキリストの福音”を知らないのです。現代のキリスト者は、「主の言葉を聞くことの出来ぬ飢えと渇き」(アモ 8:11)の中で、瀕死の状態の中にいるのです。多くのキリスト者の実感が、“聖霊が分からない”というものであるのは無理もないのです。

しかし教会は、今も使徒継承によって、確かに聖伝と聖書を受け継いでいるのです。全世界のカトリック教会の自覚ある信者が、一人一人自ら“再び聖伝と聖書によって福音を学ぶ”ことだけが、真の解決への道であることを知りましょう。

### 3. ロマ

vv.8-9 「肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。神の霊があなたがたの内に宿っている限り、……」

キリストの福音を聞いていないことが、“肉の支配下にある”ということです。“使徒たちが伝えたキリストの福音”を聞いているならば、私たちは“霊の支配下にいる”ことになります。

だれでも諸信条や各種カトリック儀式書、そして公会議文書を学べば聖伝に触れることが出来ますし、聖書を自ら読んで使徒たちの宣教に耳を傾けることは容易なことです。各人の能力に応じて学べばよいのであって、「実に、信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉(福音)を聞くことによって始まるのです。」(ロマ 10:17)

太平の眠りをむさぼって来た現代のカトリック信者は、久しく自ら学ぶことを怠って来たために、“聖霊が分からない”というところまで堕ちてしまったことに、気づかなければなりません。

v.14 「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。」

v.17 「もし子供であれば、…… 神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。」

ハレルヤ、アーメン。